

フィリピの教会で、異邦人に割礼を受けさせるようとすることを知ったパウロは、企てる人たちを犬呼ばわりしました。ユダヤ人は食物規定をもたない異邦人を、何でも見境なく食べる犬だと軽蔑していました。その軽蔑の言葉をパウロは割礼を誇るユダヤ人に投げ返し、「あの犬ども」と挑発的に呼んだのです。

彼は割礼を切り傷にすぎず、真の割礼とは身体に受ける切り傷によって神の民に属する者であると誇るのではなく、一切の人間的な価値に頼ることなく、ただ私たちのために一切を成し遂げたキリストだけを誇り、神さまに仕えることであると語ります。彼は反対者が頼ろうとしている人間的なものはもはや頼ろうとしないが、過去においては頼っていたことを5節で語っています。彼は生まれつきの特権だけではなく、律法を遵守することにおいては非のうちどころのない者であるという自負をもって生きてきました。その彼自身の在り方が根底から変わる出来事が起こりました。この出来事はパウロの回心と呼ばれています。イエス派の人たちを逮捕しようとダマスコへ急ぐ途上で、復活させられたイエスに遭遇するのです(使 9:1～19)。

7～8 節に「キリストのゆえに」という表現が三回繰り返されています。「キリストのゆえに」、キリストという評価の尺度で測るようになったため、この転換が起こったのです。キリストのゆえに 5～6 節にあげたユダヤ教徒として価値ある事柄を損失と見なすようになったのです。彼はキリストを「わたしの主」と告白しています。このキリストであるイエスに、パウロは生涯をかけて奴隷として仕えていくのです。9節で彼は自分自身を含めすべてを失うのは、キリストを得るため、またキリストの内にいる者と認められるためであると告白しています。「キリストの内にいる者と認められる」という言葉は直訳すれば、「キリストの中に見いだされる」で、神さまにより行なわれるという受動態で記されています。それは言い換えれば、キリストの中に自己を見だし、自己実現を図るということで、キリスト者としての生の根拠はキリストであるという意味です。彼は同様なことをガラテヤの信徒への手紙 2 章 19～20 節に記しています。

私たちも、キリストと出会い、パウロと同じ価値観の転換、生き方の転換というものを、経験してきたのではないのでしょうか。何が自分の人生において大切なのかということにおいて変わってきたのではないのでしょうか。洗礼と共に、一瞬にして変えられたのではなく、少しずつ、少しずつ変えられてきたのです。

神さまを知る。それは神さまがいるとか、いないとかいうことではありません。キリストの内にいる者として、神さまを愛し、神さまをあがめ、神さまに従うということ、神さまの救いの中を生きるということなのです。